

絵本の夜・紙芝居の朝

Vol.7



子供の頃、世界は恐怖に満ちていました。
たとえばひとりで部屋にいるときに、天井の木目やカーテンの影などがゆがんだ人の顔に見えてくる。怖いのでその顔の方をなるべく見ないようにしていると、今度は変な声で呼びかけてくる。耐え切れなくなって部屋から逃げ出す。すると怖くてもう部屋には戻れない。結局家族の誰かが帰ってくるまで廊下でお菓子を食べながら本を読んで過ごす、という事になる訳です。

家を一步外に出ると、そこには別の種類の恐怖が待ち構えていました。
突然暴走してきて轢かれるかもしれない車。落ちたら頭を打って血がたくさん出て死ぬかもしれないブランコやジャングルジム。触ると手からばい菌が入って、破傷風という怖い病気にかかるかも知れない砂場。かまれて狂犬病になるかもしれない犬。歩道橋を渡るのも怖いし、水がいつぱい流れているから川も怖い。そもそもひとりで外に出ること自体がとても怖いことだったのです。

週末ごとに泊まる祖父母の家は、古くて不気味で怖いものばかりが置いてありました。
夜中に気味の悪い音で鳴る大きな柱時計。毒々しい色の鳥の剥製。くすんだ色の先祖達の写真。そのひとつひとつがわざわざ子供を嚇すために作られてそこに並べられていたのかと思われる程すさまじい雰囲気湛えて部屋を飾っているのです。

夜になって布団にもぐると、今度は踏切の警報や、救急車のサイレンや、高速道路をものすごい速さで通る大型車の轟音や、その他さまざまな街の音が地鳴りの様に響いてきて、結局いつも最後は泣き出し、祖母や伯母達を困らせる事になるのです。

そんな時には、祖母が私の気を紛らわせようとして昔の話などをしてくれるのですが、「橘館通り」とか「梅屋敷」とか、祖母の話によく出てくる古い地名は何か謎めいた事件のにおいがして、不安のなかで眠りに落ちるのでした。

そんなにも怖がりで臆病な性格だったにも関わらず、私はいわゆる「怖い話」が大好きな子供でした。
大人たちが子供を怖がらせる時によくやる、突然大声を出して「うわあ」というようなものは全く怖くない上に騒がしくて興ざめでしたが、誰も来ない部屋に隠れて幽霊や怪奇現象が出てくる本を読んでいると、いつも漠然と感じ続けている不安感が増幅され、それには「恐怖」というわかりやすい名前が付けられて、それでむしろ安心するという具合でした。

京極夏彦の絵本『いるの いないの』は、子供の頃におそらく誰もが感じるそんな不安感を十分に思い出させてくれる一冊です。

少年が過ごす田舎の家の謎めいた雰囲気や、なぜかいつのまにか増えている猫達の姿が、あの懐かしくて微かに甘い不安を呼び覚まし、蘇らせるのです。

『いるの いないの』 京極夏彦作・町田尚子絵
岩崎書店 2012年

さくらももふみ
佐倉桃史®